

没後百周年のポサダ

José Guadalupe Posada a 100 años de su muerte

長谷川 ニナ
HASEGAWA Nina

José Guadalupe Posada (1852-1913) muere en la ciudad de México pero vive y trabaja a lo largo de su vida en tres ciudades. Estas son Aguascalientes, León y la ciudad de México. En este trabajo se hace una relación de su vida y trabajo en cada uno de estos lugares en base a datos históricos verificados y en observaciones analíticas recientes.

En vista de la poca fiabilidad de mucho de lo publicado sobre este grabador desde 1925, se acude aquí únicamente a 4 autores claves (Alejandro Topete del Valle, Jesús Gómez Serrano, Mariano González Leal, Rafael Barajas) aunque para completar el marco histórico se recurre a otros dos trabajos sobre la caricatura política en México entre 1829 y 1888 (uno del mismo Rafael Barajas y otro de Fausta Gantús).

La conclusión a la que se llega es que los tiempos en que se “estudiaba” a Posada fuera de su contexto histórico han terminado, así como ha terminado la irracional adoración de la que fue objeto durante casi 70 años. En la actualidad se le estudia dentro del marco de una historia más amplia que es la del impreso nacional lo que permite revalorizarlo al margen ya de todo tipo de prejuicios lo que en sí es de festejarse a 100 años de su muerte. Por falta de espacio, no se da una relación completa de todos los aspectos explorados por Barajas en torno al trabajo de Posada. Sin embargo, se recomienda enfáticamente la lectura cuidadosa de su obra *Posada: Mito y mitote* por considerársela imprescindible.

はじめに

昨年、没後百周年を迎えたメキシコの版画家、J.G. ポサーダは、1925年に壁画運動の画家たちによって著名となったものの、つい最近まで彼の生涯、思想や作品についての情報は正確さを欠いており、また政治的な思惑に影響されたこともあって、ある種の固定観念的なイメージに支配されていた。そうした従来のポサーダ像を大きく崩した一冊として、2009年発行のR. バラハス著『Posada: Mito y mitote』が挙げられる。本稿ではバラハスの研究成果を紹介するとともに、その他、ポサーダについて信頼できる知識をもたらした歴史家A. トペテ＝デル＝バイエ、J. ゴメス＝セラノやM. ゴンサレス＝レアルの研究を取り上げる。

さらにポサーダを知る上で間接的に参考になる二つの風刺画研究書、2000年に発行されたバラハス著『La historia de un país en caricatura: la caricatura de combate 1829-1872』と2009年発行のF. ガンテュス著『Caricatura y poder político: Crítica, censura y represión en la ciudad de México, 1876-1888』を紹介する。メキシコにおいて、より正確な情報に基づいてなされたポサダ研究を紹介することで、日本におけるポサダ研究の一助となることを希望する。

1. アグアスカリエンテスでの生活

アグアスカリエンテスの生活については、ポサーダは1852年2月2日、サン・マルコス地区（旧インディオ地区¹）で、8人兄弟の6番目として

1 Alejandro Topete del Valle, *José Guadalupe Posada: prócer de la gráfica popular mexicana*, México, Edición del Seminario de Cultura Mexicana, 1957, 5頁と9頁を参照。なお、旧インディオ地区については、以下のことが判明している。「サン・マルコス地区は17世紀初頭、ノチストラン、テオカルティチェ、ハルバのような村から来た先住民がアグアスカリエンテスの町外れに家を造って定住し作られた。このサン・マルコス地区が最初に統計に現れるのは1622年であり、その後すぐ、当時の統治者が先住民の村として認定し、彼らの共有地として許可された。独立後、その時点でアグアスカリエンテスが属していたサカテカス州の議会で、共有地は居住者に分配されるよう命じられた。この宣言の下、先住民達は分配されたそれぞれの土地を1826年から1834年にかけて、アグアスカリエンテスの住民に売却した。こうしてインディオ地区は消滅し、町の一地区となった。」*Barrio de San Marcos*, Gobierno del Estado de Aguascalientes <<http://www.aguascalientes.gob.mx/segob/ArchivoHistorico/docs/sanmarcos.pdf>> [最終閲覧 2013年11月21日]

生まれたことが判明している。父親はパン作りの職人だった²が、彼は小学校の教師であった³番目の兄³から基礎的な教育を受けた後、絵画学校で学長自身から授業を受ける機会に恵まれた⁴。

こうして1868年（16歳頃）、トリニダー・ペドロサ石版工房の見習いに入り⁵、1871年6月から8月にかけて、ヘヌス・ゴメス＝ポルトガル知事の再選に反対するために創刊された政治風刺雑誌『エル・ヒコーテ（蜂の一種）』の専属風刺画家に抜擢された。

この時期のポサーダの生活に関しては、歴史家のトペテ＝デル＝バジェの、1957年出版の研究書を参考にしている。というのも、以後の、この時期に関する研究の進展は見られていないからである。『エル・ヒコーテ』に関しては、1995年に出版されたアグアスカリエンテス自治大学教授の歴史家ヘヌス・ゴメス＝セラノの詳細な解説があるので、これを参照することとする。

『エル・ヒコーテ』はアグアスカリエンテスの地元の歴史と深く関わっている。

1864年、ナポレオン三世の侵略により、オーストリア出身のマクシミリアーノ皇帝がメキシコを統治することになった（第二帝政）。このことでメキシコは独立を失ったが、その後、ベニート・フアレスを中心にした国土回復戦争が起こり、1867年、マクシミリアーノ皇帝が銃殺されると共に、フアレスが大統領の座に復帰した。同年、アグアスカリエンテス出身で侵略軍と戦ったレフォルマ（改革者）党のゴメス＝ポルトガル将軍が単独候補として、アグアスカリエンテス州知事に無投票当選する。

しかし、当選からわずかヶ月で、彼と議会の間で、1868年の予算案をめぐる衝突が起こった。ゴメス＝ポルトガル新知事は派手好きで、先見性に乏しく、本来の味方のレフォルマ派であった進歩主義者の地元の農園主達から、税金を絞り立てようとしたのである。

2 ポサーダの父親については、以下のことがわかっている。ポサーダの父、ドン・ヘルマンは1821年に生地 Real y Minas de Nuestra Señora de Belén de los Asientos de Ibarra を去り、アグアスカリエンテスのインディオ地区に住み着いた。Topete del Valle 前掲書、5頁。

3 兄のホセ・シリロを指す。同書、10頁。

4 Academia Municipal de Artes y Oficios 学長のアントニオ・パレーラを指す。同書、10頁。

5 ホセ・トリニダード・ペドロサは、アグアスカリエンテス知事であり、地域の発展のために積極的に尽くした改革派のリーダーの一人であったホセ・マリア・チャベスの甥である。Rafael Carrillo, *Posada y el grabado mexicano*, México, Panorama, 1991, p. 17.

4 長谷川ニナ

農園主達は憤慨し、ゴメス＝ポルトガル知事の勝手にさせまいと抵抗し、1871年の選挙に向けて、チャベス党という反対政党を作るまでになった。

この対立は印刷物にも反映する。同じく、フランスとの戦いで命を落とした共和国側の英雄であるホセ・マリア・チャベス⁶の息子ソステネス・チャベスが、地元で名高い自分の印刷工房をチャベス党に提供し、1869年1月20日、チャベス党員は州の著名人750人の署名を集めた公開書簡を出す、知事は一顧だにできなかった。

一年半後、大統領選挙と州知事選が行われることになった。チャベス党は選挙の準備を固めていたが、ゴメス＝ポルトガルは、大統領選で、ベニート・ファレスに対抗するレルド派を不正な手段で勝たせようとし、自らも再選を試みようとした。『エル・ヒコータ』では、この二つの選挙で起こったことを暴露し、知事を愚弄している。

前述の歴史家ゴメス＝セラノの、この風刺画に関する解説を見てみよう。

『エル・ヒコータ』1号は、この雑誌の創刊号であり、ポサーダにとっても最初の風刺画である。当時、ポサーダは19歳で、工房主のトリニダー・ペドロサは彼の石版工房を、知事のネガティブ・キャンペーンのために、チャベス党に提供した。そこに、ポサーダが運命的に居合わせたのである。

この画には、ホメオパシー医師（当時はこのような同毒療法が非常に盛んだった）でゴメス＝ポルトガル党の下院議員であり、かつ風刺紙『ラ・ヘリンガ（注射器の意味）』の責任者ファン・G・アルカサルも登場する。この人物がロバに乗り、奥には彼が市民病院を任されていた頃の無能さを示す墓がある。彼は自分のロバを刺した蜂を追い払おうとしているが、この蜂こそが他ならぬ『エル・ヒコータ』である⁷。

『エル・ヒコータ』2号は、ゴメス＝ポルトガルがファレスの再選を応援しているように見せかけていながら、実はレルドを支援しているという本音を暴いている。この風刺画は知事を激怒させたであろう。なぜなら、

6 José María Chávez は知事在職中の1864年4月5日、フランス軍に射殺された。Topete del Valle, 前掲書11頁、及びアグアスカリエンテス州発行のWebpage「José María Chávez (1812-1864)」を参照。<http://www.aguascalientes.gob.mx/estado/aguascalentenses/jose_machavez.aspx> [最終閲覧2013年10月30日]

7 『El Jicote』1号。Gómez Serrano, *José Guadalupe Posada: testigo y crítico de su tiempo*, México, Universidad Autónoma de Aguascalientes, 1995年、87頁を参照。

ポケットに酒瓶を入れ、彼がアルコール中毒であることも示唆しているからである。ここに描かれているオウムは彼の右腕のアグスティン・R・ゴンサレスである（この人物の渾名が「オウム」だった）⁸。

『エル・ヒコーテ』3号は、以前の選挙を回想し、これから起こりうることを予想している。すなわち、現政府が行うであろう買収や反対派への投票妨害である。奥にはレルドと「オウム」の肖像画がある⁹。

『エル・ヒコーテ』4号は、ゴメス派の指導者の一人マヌエル・コロナが、これから投票しようとしている人の髪を掴み、レルドの胸像を指さし、投票を強要しているところを描いている。もっとも笑いを誘うのは、この、たった一人の投票者のために4人もの警官を動員していることである¹⁰。

『エル・ヒコーテ』5号では、ゴメス党員は必死で油を塗った棒（政治権力争いの象徴）を上ろうとしている。左側には「オウム」が見える。注目すべき点は、その翌日（7月10日）が大統領選挙で、フアレス、レルド、ディアスが三つ巴で、接戦を予想されていたという事実だ。結果的にはフアレスが勝ったのであるが、ゴメス＝ポルトガルは密かにレルドに肩入れていたため、すぐにその結果を公表しなかったのである¹¹。

『エル・ヒコーテ』6号は、7月16日に出る予定だったが、発行延期になった。というのも、ゴメス＝ポルトガル知事が、この雑誌がペドロサではなく、以前、州の著名人750人の署名入り公開書簡を印刷したソステネス・チャベスの工房が発行していると勘違いして、彼を逮捕しようとしたためである。すなわち知事選が近づいていたので、『エル・ヒコーテ』が発行され続けることに危機感を抱いていたのだ。

幸い、ソステネス逮捕前に、地裁の裁判官が彼の勾留請求を却下したため、ポサーダは彼と合意の上、第6号の風刺画で、7月の23日にまさにこの問題を取り扱うことにしたのである。この風刺画では、二人のゴメス党員が奇妙な形の大砲を担ぎ、トリニダー・ペドロサは出版法を盾にして身を守ろうとしている。壁の後ろにはソステネス・チャベスが隠れている¹²。

8 『El Jicote』2号。同書、90頁を参照。

9 『El Jicote』3号。同書、92頁を参照。

10 『El Jicote』4号。同書、94頁を参照。

11 『El Jicote』5号。同書、95頁を参照。

『エル・ヒコーテ』7号では、1871年8月3日に予定されていた知事選挙をテーマにしている。ゴメス＝ポルトガルの対立候補は、チャベス党に支援された莊園主カルロス・バロンであった。この期に及んで、ゴメス＝ポルトガルの同盟者（「オウム」とマヌエル・カルドナ）は、雲行きが悪いと見て取って、知事を見放し始めた。にもかかわらず、ポサーダの筆では、まだゴメス＝ポルトガルは二人のおべっか使いに偉そうにかしづかれている¹³。

『エル・ヒコーテ』8号では、ゴメス＝ポルトガルの「病気」により、選挙が延期されることになったことを扱っている。実際には、すでに選挙不正が明るみに出て、勝つ見込みがなくなっていたためであった（多くの支援者は刑務所に入れられ、しかも、大統領になったファレス派からは裏切り者と見なされていた）。州議会は彼の病気休暇を認めたものの、知事代理としてチャベス党の、イグナシオ・T・チャベス医師（ソステネス・チャベスとの間に血縁関係はない）を任命した。すなわち、ゴメス＝ポルトガルは完全に孤立させられたのである。この風刺画では、かつて仲間だった政治家たちが、皆、彼を裏切り、「宙返りをして、うまく着地する」ことを試みていることをポサーダは暗示している¹⁴。

『エル・ヒコーテ』9号に関しては、ヘスス・セラーノの解説はない¹⁵。

イグナシオ・T・チャベス医師は形式的な知事代理ではなかったことは、すぐに明らかになった。その証拠に、ゴメス党が押しつけた税制を崩すために、彼はすみやかに特別な権限を発動し、さらに地方選挙の日時を8月20日に設定した。この選挙は穏やかに行われ、チャベス派のカルロス・バロンが92.6%の圧倒的得票で知事に当選する。ポサーダは『エル・ヒコーテ』10号で、この新しい政府の誕生を描いた。左側には目隠しをして揺

12 『El Jicote』6号。同書、100頁を参照。バラハスはその書の中で、『エル・ヒコーテ』6号は1871年7月16日に発行されたとしているが、しかしながら、これは彼が参照したとするゴメス＝セラーノのデータを反映していない。ゴメス＝セラーノのデータでは、6号の発行日は7月23日である。バラハスはこの6号の誤った発行日から計算して、7号（1871年7月23日）、8号（1871年7月30日）、9号（1871年8月6日）、10号（1871年8月14日）、11号（1871年8月20日）としているが、それは確実ではない。同誌は発行禁止など、諸処の事情で定期的に発行されておらず、何度か発行日がずれている可能性がある。それぞれの発行日を確定すべきである。

13 『El Jicote』7号。同書、102頁を参照。

14 『El Jicote』8号。同書、105頁を参照。

15 『El Jicote』9号。同書、112頁を参照。

りかごを揺らしている正義の女神（正義の女神が目隠しをしているのは、不正がない証拠を意味する）がおり、右側では、ソーラナ地方判事が墓石でゴメス派を潰している。満足そうにそれを見ている墓堀人は民衆を象徴している¹⁶。

『エル・ヒコーテ』11号の最後の風刺画では、先の地方選挙で票を操作するために投票所の机に割り込もうとした数人のゴメス派を、人々が引きずり下ろしている場面である。いままでの不正なやり方が一掃されたことを示しているのである¹⁷。

以上の情報は、ゴメス＝セラーノの研究によるものである。

ここには、アグアスカリエンテスでの彼の生活についての、4点の重要なポイントがある。

1. 当時のポサーダを教育し、雇用していた人々はリベラルな共和国派、連邦主義者たちであり、外国の侵略やロペス・デ・サンタ・アナのような独裁政権や大統領再選に反対する立場であった。
2. ポサーダの直接的・間接的な師は一流の版画家であった¹⁸。
3. ポサーダが生まれ育った地区は旧インディオ地区であった。
4. 彼や彼の兄が参加した教育システムは非宗教的な教育を根付かせようとした共和国の努力の成果であった。

2. レオンでの生活

彼のレオンでの生活は1872年に始まる。彼の雇い主のペドロサがアグアスカリエンテスを離れ、レオンで印刷工房を開くために、若かりしポサーダを連れて行ったのである¹⁹。そしてポサーダはそこで家族を持ったこ

16 『El Jicote』10号。同書、113頁を参照。

17 『El Jicote』11号。同書、116頁を参照。

18 ホセ・トリニダッド＝ペドロサとアントニオ・バレーラや、その他の『ラ・オルケスタ』に執筆していた風刺画家たちを指す。ゴメス・セラーノは、ポサーダは隔週刊の「ラ・オルケスタ」紙の4人の風刺漫画家 Santiago Hernández (1833-1908); Escalante (1836-1868); Iriarte (1820?-1897?); Villasana (1848-1904) に影響を受けたと述べている。バラハスも、その著書の中で (『Posada: Mito y Mitote, México』 Fondo de Cultura Económica, 2009, p.49.) 「『エル・ヒコーテ』での絵のタッチやテーマの扱いは、Constantino Escalante、Santiago Hernández、Honoré Daumier や Grandville の影響が明らかである」とこの考えを支持している。

とが知られている。彼は 1875 年、23 歳で、16 歳の若い娘と結婚した²⁰。歴史家のゴンサレス＝レアルの集めた証言によれば、ポサーダはここに母親と弟を呼び寄せた²¹。ポサーダがレオンに移る二ヶ月前に、父親は病死していたのである²²。

アグアスカリエンテスの歴史家トペテ＝デル＝バジェは、ポサーダは正式の妻との間には子供は生まれず、まったく情報のない別の女性との間に一子をもうけたと考えている²³。レオンでの写真スタジオで撮影された 1 枚とメキシコ市の彼の工房の前で撮影された 1 枚の、計 2 枚しか遺されていないポサーダの写真に映っているのが、その子供と思われる²⁴。実際のところその妻や子どもについてはほとんど何も知られておらず、これからの研究が待たれるところである。

家族を持ったほかには、ポサーダはレオンで安定した仕事を展開させた。20 歳でペドローサについてレオンに来て、2 年間働いた後、ペドローサはアグアスカリエンテスに帰るために、工房をポサーダに売ったのである。この工房は『最低限のものがそろっている』小さなものだった。

1884 年 (32 歳) には、ポサーダは宗教版画や挿絵、煙草や葉巻の箱などのデザインだけではなく、レオン市の公立中学で石版画を教えるようになっていた (1884 年 1 月 15 日－1888 年 1 月 20 日)²⁵。

19 バラハスによると、ペドローサの工房は、1873 年 5 月 15 日に開かれた。レオン市に移住した理由については現在に至るまでの様々な仮説を同書、50 頁で紹介している。

20 同書、13 頁。

21 同書 8 頁と 17 頁を参照。カリージョは、その著書 (Carrillo, 前掲書、12 頁) の中で「オレガリオ・ミレレス＝デ＝レオン神父が、『ポサーダ兄弟』とサインされた何枚かのポサーダのイラストを発見した」と述べている。マリアノ・ゴンサレス＝レアルはその著書の中で (*La producción leonesa de José Guadalupe Posada*, Mexico, Lito Offset Lumen, 1971)、実際に、そのように署名されている版画 ([グラナディタス監獄とその周辺の景色]) を載せている。トペテ＝デル＝バジェは、その著書 (Topete del Valle, 前掲書、14 頁) の中で、ポサーダが、おそらく、レオン市に呼んだのがその最年少の弟シリアコであった可能性があることを明らかにしている。

22 1871 年 9 月 16 日のことである。Topete del Valle, 前掲書、12 頁。

23 「版画博物館 (Museo de la Estampa)」の『La cronología de José Guadalupe Posada』の資料によると「1883 年、彼の唯一の子供であるファン・サビーノ・ポサーダ＝ベラ (Juan Sabino Posada Vela) が誕生した」とある。
< <http://www.museonacionaldelaestampa.bellasartes.gob.mx/pdf/CronologiaPosada.pdf> >
[最終閲覧 2013 年 10 月 30 日]

24 レオン市でのポサーダとその息子の写真に関するデータは、ゴメス＝セラノの書による (Gómez Serrano, 前掲書、187 頁)。また、メキシコ市でのポサーダとその息子の写真は、バラハスの書によるものである (Barajas, 前掲書、18 頁)。

数多くの証言によれば、彼の生活は一生を通じてつましいものだったとはいえ、この時期のポサーダの生活は中でもっとも落ち着いたものであったと言えよう。しかし、この安定した生活は、36歳で被ったレオンの大洪水により、全て失われる。

上記のような個人的なデータと彼のレオンでの仕事の成果である24枚のイラストは、マリアノ・ゴンサレス＝レアルが1971年に出版した、短いが貴重なポサーダの研究論文で見ることができる。

ここから、レオンでの彼の生活についての、3つの重要なポイントがわかる。

1. この時期の作品で、ゴンサレス＝レアルが見つけることができたのは、わずか24枚だった。しかし、風刺漫画家であり研究者でもあるラファエル・バラハスは、これらの作品から、この時期のポサーダは政治風刺ではなく、挿絵入りの新聞を主な仕事にしていたことを指摘している。
2. ポサーダは1884年に中学校で教師の職に就くことで、当時、政治家であり教育者であったガビーノ・バレーラが広めた実証主義的な思想に触れた²⁶。
3. Th. H. バローの『Livre de Morale Pratique』のスペイン語版の挿絵を任されたことを通じて、ヨーロッパの版画作品を知った。

25 カリージョの著書(Carrillo, 前掲書, 23頁)では、以下のように記載されている。「私は、1962年に中等師範学校、現在のレオン高等学校の資料保管庫で、調査をすることができた。ポサーダは中学校の教師として、1883年4月4日から石版印刷を教え、同年4月から10月までの間、135ペソが支払われ、また工房の必要としていた補償費として50ペソが支払われていた。ポサーダは「実践的な」石版の先生であり、1884年まで隔週で8ペソ9センタボ、すなわち月給にして15ペソが、休暇期間は無給という条件で支払われていた。」また、ポサーダの仕事に関しては、カリージョは、「1962年にグアナファト州レオンで得た情報によると、当時、90歳で、ポサーダの生徒であったエンリケ・O・アラランダ氏は、彼は石を準備し、中性石けんと精製した油と、不純物のない蠟とセラックと黒煤で石版鉛筆を作り上げることを教えてくれた」(同書、15頁)とも付け加えている。

26 Barajas, 前掲書、60頁。

27 前者は、『El Ahuizote』(1874-76)、後者は『El Padre Cobos』(1873-76)を発行している。同書、72頁。

3. メキシコ市での生活

彼のメキシコ市時代については、1888年6月18日から19日のレオンの大洪水のために全てを失い、仕事を求めて移住してきたことがわかっている。

これらについては、バラハスが著作『Posada: Mito y Mitote (ポサーダ、その様々な神話)』で発表した新しい発見や、綿密に整理された信憑性のあるデータに基づき、次のようなことがわかる。

1. メキシコ市に着くと、ポサーダは雑誌『La Patria Ilustrada』のために挿絵を描いている。この雑誌は週刊で、オーストリアのマクシミリアーノ皇帝銃殺の後で自由党内部で権力争いがあった時代に、二人の筋金入りのポルフィリオ・ディアス主義者（ホセ・マリア・ビジャサナとイリネオ・パス）によって発行されていた²⁷。
2. ビジャサナは有名な政治雑誌『La Orquesta』の政治風刺画家でもあり、ポサーダが彼と仕事をする機会を得たのは、彼の絵画のプロとしての技量を極める点で幸運だった。
3. 1890年、セラダ・デ・サンタ・テレサ通り2番地に小さな彼自身の印刷工房を開いた²⁸。
4. 1891年、バネガス＝アロージョの印刷工房とも仕事の契約を結び、死ぬまで両者の関係は続いた²⁹。

1953年にレオポルド・メンデス（1902-1969）が、この時期のポサーダを想像して描いた版画がある。1892年のディアス政権の庶民への弾圧に憤慨するポサーダの姿を描いたもので、恰幅のいいポサーダが工房の窓越しにデモを弾圧する官憲に鋭い視線を向けている。

この作品は大変強い印象を残すもので、後のポサーダに対する見方に大きな影響を与えた³⁰。

28 「おそらく、受注した仕事量が多かったため、版画家は自分の工房を立ち上げる必要があったのだろう。最初は、セラダ・デ・サンタ・テレサ2番地の家で、後に、サンタ・イネス通り（現在のモネダ通り）5番地に工房を持った。ルベン・M・カンボスがポサーダと話しができたのはこの二件の工房のいずれかであった。」 Carrillo, 前掲書、29頁。バラハスはRubén. M. Campo, *Folklore Literario en México*, México, SEP., 1929, p.372を参照している。

29 Barajas, 前掲書、111頁。

しかしながら、バラハスはこの絵からは想像もできなかった事実を明らかにした。実際のポサーダはこの1892年には、むしろデモ参加者をなだめる側にいたことがわかっている。というのも、バネガス＝アロージョが発行した、この事件に関する新聞の中に、大群衆の中で車の屋根に乗って手を広げている男の姿を描いた一枚の絵がある。この人物は一見、群衆を煽っているように見えるが、添付の文章を読めば、事実はそうではなく、民衆をなだめていることがはっきりと書かれている。そして、この人物こそ、当時のポサーダの雇い主の一人で印刷屋のアウレリオ・レジェスなのである³¹。

同じ1892年、ポサーダはフランシスコ・モンテス＝デ＝オカの仕事も得ている。彼は大衆向けの政治風刺画を手頃な価格で製作し販売していた³²。また、前述のアウレリオ・レジェスの『El Fandango』³³や『El Periquillo』³⁴のような労働者階級向けの多くの小冊子にもイラストを描いていた。

その他、『El Diablito Rojo』、『La Guacamaya』、『El Periquillo Sarniento』、『El Diablo bromista』、『El Pinche』、『La Araña』、『La Palanca』、『El Chile Piquín』、『Don Cucufate』、『Juan Panadero』、『San Lunes』などの小冊子にも描いている³⁵。

ここで言及されている情報は、非常に貴重なものである。というのも、50年以上にわたって、これらの詳細について、多くの誤ったデータや誤解があったものが、ここでバラハスによって、徹底的に検証されたからである。彼の分析は膨大な資料を背景にし、客観的で論理的なものであるため信憑性が高く、ポサーダを理解する上で極めて参考になる。従来までの定説の何が正しく、何がそうでないか³⁶を厳密に考証した上で、明確に線を

30 同書、30-31頁を参照。

31 Vanegas Arroyo 印刷工房発行の1892年5月『La Gacella Callejera』1号及び2号を参照。Barajas、前掲書、119-120頁。

32 ポサーダは、実際に、モンテス＝デ＝オカの殆どの雑誌（1892年の『Gil Blas』、1895年の『Gil Blas Cómico』、1897年の『El Popular』、『La risa del Popular』）などに協力していた。同書、121-158頁。

33 『El Fandango』、1894年5月6日。同書、181頁を参照。

34 『El Periquillo』、1895年8月8日。同書、186頁を参照。

35 同書、205-206頁。

36 バラハスは以下のような例を挙げている。「フランシスコ・トール (Frances Toor) は、ポサーダが『Argos』、『La Patria』、『El Ahuizote』、『El Hijo del Ahuizote』といった『反ディアスの』新聞で働いたことがあるを断定しつつ、それが意味することをまったく理解でなかったのである」と。同書、34頁。

引いてくれるだけではなく、以下のテーマについての詳細に言及している。

- － これらの雑誌の製作者は誰か
- － 挿絵画家はどういう人たちか
- － 購入層はどういう人たちか
- － 非購入層はどういう人たちか
- － 資金はどういったものだったか

すなわち、これらの出版物は無名で資産階級に属しない新聞記者に製作され、大きな出版社では雇ってもらえないようなポサーダや、後に言及するマヌエル・マニージャのような庶民階級の版画家が挿絵を描いた。政治性のない職能組合に属するような職人や労働者が購入し、カトリック系のグループの労働者は購入しなかった（ポサーダは政教分離主義者だった）。そして、資金は製作者自身が低コストを常に求めながら運用していたということである。

4. ポサーダの仕事の特色

バラハスの分析は、ポサーダのメキシコ市での仕事についても前例のない重要な示唆に富んでいる。彼は「政治風刺画がホセ・グアダルルーペ・ポサーダの経歴の中心的な活動」で、そしてそのことが「ポサーダに定収入を与え」³⁷「1900年から1910年にかけて、メキシコで風刺画で食べていける数少ないプロ作家であった」³⁸と断定している。また、これらのポサーダが働いていた労働者階級向け雑誌の製作者たちに関しても、興味深い点に言及している。彼らは「あまり知られていない新聞記者で、その編集室は小さなものだった。記者と編集者が兼任であることも珍しいことではなかった」³⁹。

しかし、同時に、バラハスはかつて誰も言及しなかったことも主張している。ポサーダも雑誌の編集者たちも、その読者も、そのいずれも、反ディアス主義者というわけではなかったということだ。

1925年から2000年までの長い期間にわたって、ポサーダには「メキシコ

37 同書、206頁。

38 同書、206頁。

39 同書、206頁。

の大衆的で革命的なアーティスト」というレッテルが貼られていたことを考えると、これは重大な指摘である。「革命的である」ということは、当時の、革命後に政権を取った政治体制に気に入られ、優遇されるということだったからで、すなわち、ポサーダ擁護派たちは、このポサーダのイメージを損なうような不都合なデータについて意図的に触れないようにしてきたということだからだ。

バラハスの研究のおかげで、ようやく我々は誤りを恐れることなく、長い間にわたってタブーであった真実に触れることができるようになったと言える。

バラハスはポサーダだけがディアスを賞賛していたわけではなく、事実上、当時の労働者階級向けの政治風刺新聞のほぼすべてがそうであったことにも言及している。また、そうであるからこそ、ディアス政権下で、これらの印刷物の発行が許可されていたのだ。これらの風刺画では搾取者に対して、むしろディアスの庇護を求めており、両者の結託については一切触れていない⁴⁰。

追記すると、バラハスは、ディアスは独裁者であったとはいえ、マキシミリアーノ帝政時代を終わらせた、かつての国土回復の英雄のひとりであったこともまた事実であるがゆえに、彼に対してのこれらの人々の点の甘さは、それはそれで誠実なものであり、「これらの印刷物が政府の金銭的補助を受けていたとまでは考えられない」⁴¹としている。

とはいえ、『El Hijo del Ahuizote』発行者のダニエル・カブレラや、『El Colmillo Público』発行者のヘスス・マルティネス＝カリオンのような真に反体制的な人々は、尾行を受けたり投獄されたりしていた⁴²。

1905年の終わりには、「リベラルで、政党派色があり、風刺の強い反ディアス政権的な雑誌はすべて潰されている」⁴³。ディアス政権は、「1877年から1880年の間とそれ以後で変質している」と、バラハスは記述する。

その証左として、ディアス派のマヌエル・ゴンサレスが検閲法を施行し(1883年)、1886年には別の法律も施行した。これらの法律は人々の間で「口

40 同書、335頁の1909年12月20日発行の版画を参照。

41 同書、219頁。

42 同書、220頁。

43 同書、220頁。

封じ法 (Ley Mordaza)」「強迫法 (Psicología)」と呼ばれていた。前者は、ディアスの最初の再選を可能にするものであり、後者は連続再選を可能にすることで、彼の長期政権を確固たるものにするためのものであった。

さて、そこでポサーダの仕事に話を戻す。彼が反ディアス主義者でなかったとすれば、いったい、何であったと言えるだろうか？

バラハスの研究のおかげで、ポサーダのイラスト作品は彼自身の考え方を如実に表していることがわかっている。常に、自分の思想と合った出版者と仕事をし、描く内容に関しては誠実であった。たとえば、

- ・搾取者やその配下が心ない人々である様子⁴⁴
- ・被搾取者が運に見放された人々である様子⁴⁵
- ・農園監督や手配師のサディスティックさ⁴⁶
- ・外国の侵略を許容する人々を売国奴として⁴⁷
- ・社会の秩序を乱す思想家や政治家を、無責任なものとして⁴⁸
- ・教会関係者については、偽善者として⁴⁹
- ・先住民については、野蛮なものとして⁵⁰
- ・外国人や同性愛者については、嘲りの対象として⁵¹
- ・ディアス周辺の政治家については、ゴマスリ屋として⁵²
- ・ファレスや共和主義的価値観については、高く評価⁵³

ポサーダは、マデロや彼が代表するディアス再選反対運動についてはむしろ懐疑的で、マデロについては、そのイメージをむしろ貶め、動機を誹謗している⁵⁴。

考えられていたのとは逆に、叛乱する弾圧された民衆に対しては、必ずしも好意的ではなく、無秩序で扇動されやすいものとして描いている⁵⁵。

44 『La Guacamaya』、日付不明。同書、236頁を参照。

45 『La Guacamaya』、1902年8月11日。同書、224頁を参照。

46 『La Guacamaya』、1904年8月25日。同書、237頁を参照。

47 『Gil Blas』、1911年9月7日。同書、275頁を参照。

48 『El Diablito Rojo』、1909年10月、同書。243頁を参照。

49 『La Guacamaya』、1904年4月21日。同書、285頁を参照。

50 『El Diablito Rojo』、1901年5月20日。同書、327頁を参照。

51 『La Guacamaya』、1907年7月25日。同書、266頁を参照。

52 『El Diablito Rojo』、1901年1月21日。同書、316頁を参照。

53 『El Pinche』、1904年7月21日。同書、286頁を参照。

54 『Gil Blas』、1911年7月16日。同書、275頁を参照。

55 『La Guacamaya』、1911年4月9日。同書、355頁を参照。

また、先住民の土地の守護者であったサパタ主義者たちに対しては、嫌悪感すら感じており、山賊や人殺しのようにはしか捉えていない⁵⁶。

バラハスが彼の著作を通じて挙げている例では、明らかにポサーダは（従来言われていたとおり）民衆の側にいることは確かではあるが、ディアスが新聞記者を逮捕拘留した際に、表現の自由を害するものとしてディアスを批判したことはあったにせよ、いわゆる反ディアス主義者や革命派とみなされてきたイメージには当てはまらない⁵⁷。

5. 1871年から1888年でのメキシコ市における検閲

1888年にポサーダが首都に移住してきたときの政治的環境について述べる前に、1871年以後のメキシコ国家全体の政治的状况について概説する。この1871年とは、ファレスが再選され、ポサーダが風刺画を描き始める年である。国内の政治的背景の中でのポサーダの位置づけのために、ラファエル・バラハス著『風刺画で見る、ある国の歴史：政治闘争の風刺画 1829-1872 (La historia de un país en caricatura: la caricatura de combate 1829-1872)』と、ファウスタ・ガントゥス著『風刺画と政治権力：メキシコ市における批判、検閲、弾圧 1876-1888 (Caricatura y poder político: crítica, censura y represión en la ciudad de México, 1876-1888)』の2冊の書物を参照する。

まず、疑問となるのは、1871年1月の、ポサーダがいまだ自分の将来が風刺画家になることを知らない段階で、共和国に何が起こっていたかである。既に見てきたように1871年は大統領選の年であったが、通常と違い、1857年憲法の下で大統領再選が禁じられていたにもかかわらず、大統領の座を現大統領のファレス、レルド、ディアスの3人が争っていた。

このような状況下で、別の疑問が生じる。再選禁止規定にも関わらず、ファレスが再立候補することは、どのような問題を引き起こすかということである。それは実は大きな問題であった。過去のサンタ・アナの独裁のような事態を防止するために規定された、1857年憲法の大統領再選禁止

56 『La Gaceta Callejera』、1910-1912年頃。同書、389頁を参照。

57 『El Diablito Bromista』、1905年10月8日（同書、294頁）・『El Diablito Bromista』、1905年9月24日（同書、294頁）・『La Guacamaya』、1904年2月11日（同書、295頁）を参照。

規定を反故にすることは、結果的に後のディアスの大統領連続再選による長期独裁の道を開いたからである。

ファレスが敢えてこの拳に及んだのは、彼が1867年のフランス侵略から共和国を救った英雄であったということだったが、彼の再選は人々が彼を強く支持していたとしても、現実的に問題であった。バラハスの解説によれば、ファレスは農民層（その大多数は先住民であった）の利益の代表者ではなく、アシエンダ（荘園）を「封建的な奴隷制度から、農産品輸出のための資本主義的農園経営へ転換させようとしていた」⁵⁸ 近代的な農園経営者の利益の代表者であり、植民地時代の名残であるペオン（小作農）を事実上の無償労働者として利用するものであった。

「ベニート・ファレスは、1847年にオアハカ州の知事であった頃から、荘園経営者の相談に乗っていた」⁵⁹ と、バラハスは指摘する。

ファレスの国家計画の中では、社会経済的正義というものにはメキシコ農民のためのものではなく、彼らはそれ以前同様、奴隷状態に置かれるということが最初から明らかだったということだ。

そのような国家計画に反対して、多くの自由主義者が抵抗した。そのため当時のリベラル派の新聞には、反ファレスの政治風刺画が多く見られると、バラハスは述べている。

一言で「自由主義者」と言っても、近代的農園主の利益代表者もいれば、社会全般の代表者もいたのである。この後者の人々は（まったく違う理由ではあったが）、保守主義者と同様、ファレスを批判したのであった。

バラハスは著作の中で、1861年5月8日の『ラ・オルケスタ』誌に掲載された風刺画を紹介している。この絵では、ファレスとその側近は、先住民を先祖伝来の共有地から引き剥がそうとしている姿を厳しく批判されている。ここでは、ファレスは「教会から毛の一本も残さず剃り落としておきながら、成果はなし」（教会財産を国有化しておきながら、依然として、財政再建ができない）、そして次には、「貧しい庶民の髪まで切ろうとしている」（先住民の共有地まで国有化しようとしている比喩）と描かれる。

以前、本論で述べたように、ポサーダは「旧インディオ地区で生まれ育っ

58 Rafael Barajas, *La historia de un país en caricatura: Caricatura de combate 1829-1872*, México, CONACULTA, 2000, p.59.

59 同書、58頁。

て」いる。しかし、この「旧インディオ地区」こそが、フアレスが収奪しようとした土地なのであった。

「スペイン人たちがメキシコを捨てた段階で、二つの大きなグループが巨大な土地を所有し、荘園の拡大の制限となっていた。それが教会とインディオ共同体だった」⁶⁰と、バラハスは説明する。だからこそ荘園主達は、自由主義者の近代化政策に賛同したのである。

そこで1871年の選挙に話を戻すと、インディオ共同体を犠牲にしてまでの荘園主達への利益誘導に反対する自由主義者たちのグループは、風刺画を通じてフアレスの再選に反対し、1857年憲法遵守派を応援した。つまり、それがこの時点でのポルフィリオ・ディアスであり、彼もまた、フランス人との戦いで身を危険に晒した軍人でもあった。むしろこの時点では、彼が後に独裁者になろうとは誰も想像していなかったのである。

むしろ、当時、先進的な自由主義者の間では、フアレスが独裁者になろうとしているのではないかという懸念があったことは間違いなく、1869年の2点の風刺画で、すでにフアレスが検閲をしようとしていること⁶¹や、票を買おうとしていることが描かれている⁶²。「(エル・ヒコーテ」誌の風刺画3で、ポサーダはこのことを指している)。

しかし民衆にとっては、フアレスは依然として英雄であり、彼を批判することはタブーだった。そのため多くの風刺画家はフアレスを直接攻撃するのではなく、その側近のレルドに矛先を向けている。

1871年の選挙は、したがってデリケートなものであった。というのも、この選挙では、それまでフアレス側近であったレルドがフアレスの対立候補となったからである。選挙はフアレスの勝利となったが、バラハスは『ラ・オルケスタ』誌で、フアレスとレルドが選挙の後、(恋人同士のように)口づけて、和解している様を描いている作品を紹介している⁶³。明らかにこの画の意図は、この二人の政治家を嘲るものであり、二人が野心だけで結ばれていることを示している。

1871年から、ポサーダが上京する1888年の間には、多くのことが起こっ

60 同書、60頁。

61 『La Orquesta』、1870年1月19日。同書、303頁を参照。

62 『La Orquesta』、1869年6月30日。同書、286頁を参照。

63 『La Orquesta』、1871年9月2日。同書、345頁を参照。

た。ファレスが1872年7月18日に不慮の死を遂げ、レルドが4年にわたって大統領の地位に就く。ディアスはこれに抵抗し拳兵するが、失敗に終わり、地方に戻った。

この4年間の後、レルドも大統領再選を狙うが、これはファレス再選反対運動の人々によって阻止された。そして、ここからポルフィリオ・ディアスの統治が始まるのである。この1876年に、ディアスを信頼できる人物のように描く風刺画があれば、その逆にまったく信頼できない人物として描いているものもある。

歴史が証明したのはディアスが信頼できない人物であるということだった。彼の手によって、ポサーダが上京した1888年に、表現の自由はほぼ失われてしまったのだ。ディアス政権下の12年間、ディアスの政策を少しでも批判した新聞記者は迫害されたのである。

ポサーダは独裁者のこの側面を過小にしか描いていない。しかしながらファウスタ・ガントゥスの研究によれば、ディアスは権力を握ったその時から、1857年憲法を着々と骨抜きにしていたのである。

ディアスが政権に就いてわずか1年後の1877年の風刺画で、すでに怪物のように描かれていることをファウスタ・ガントゥスは紹介している。すなわち「背後で起こっている先住民や軍の反乱などに対して激しい弾圧を加えている一方で、自分はまるでそれらとは何の関係も責任もないかのように振る舞う、不気味なロボットのような姿⁶⁴」である。

その3年後の1880年8月28日、『El Padre Cobos』誌には、選挙の年に国を漂っていた「政治に対する不信感」についての風刺画を掲載している⁶⁵。

ディアスはメキシコの主となっていて、もはや対抗勢力はなかった。当時の風刺画家たちは、「議会在権力におもねって、重要性を失い、軽いものになってしまった様を率直に」描いている。

この1880年には、一応、法に従い、ディアスは側近のマヌエル・ゴンサレスに大統領の座を譲った。むろん4年後の1884年に取り戻すことを前提にしてのことである。ディアスは1878年に大統領再選禁止法が改選さ

64 Fausta Gantús, *Caricatura y poder político: Crítica, censura y represión en la ciudad de México, 1876-1888*, 2009, México, El Colegio de México/ Instituto Mora, p. 191.

65 同書、197頁。

れたので、何の心配もしていなかった。そのうえ 1882 年には、ディアスへの忠誠心の証として、マヌエル・ゴンサレスにより、「上院と下院が、憲法 7 条を改正し、これ以後、印刷に関連する犯罪が通常の法廷で裁かれることとなった」⁶⁶。これが有名な「口封じ法 (Ley Mordaza)」で、ディアスは、気に入らない記者をいつでも投獄できるようになったのである。

このような状態でも、1885 年には、まだ 1857 年憲法の理念を護るために命がけて投獄の危険も顧みない記者達は存在した。抑圧の残忍さを描いた風刺画『遭難者』⁶⁷は、1885 年 8 月 23 日、『El Hijo del Ahuizote』誌に掲載された。しかし、その後の 1886 年には、政府はさらに国家や要人に対しての名誉毀損を罪とする法律（人々の間では「強迫法 (Psicología) と呼ばれた」) を施行した。これによって、いつでも判事が主観的な解釈だけで、記者に対する告発を裁くことができるようになった。これに対して、すべての風刺画家たちは団結して、誰か記者が投獄されるたびに、この検閲の問題を取り上げるのであった。つまり「強迫法」を恐ろしく醜い老婆や、荒々しい牛などに例えたのである。

これらの印刷物や表現の自由への弾圧は、1887 年 4 月 21 日の、大統領職の連続再選を可能にする憲法 78 条の改定を行うために必要だった。1888 年は、ガントゥスによると反対派の出版社の大半が弾圧や圧力を受けているという、もっとも緊迫した時期だった。例えば、「独立系の 4 大日刊紙のひとつが国家の状況の重大な問題についてのニュースを載せたとしても、売り子はその見出しすら声に出せない」⁶⁸ ような状況だったという。

それが、まさに 1888 年の、ポサーダがメキシコ市に着いた頃の状況だった。そのため、1889 年から 1910 年 11 月 20 日の失脚まで、独裁者ディアスはこういった弾圧によって、「国家のために必要である」人物として、すべての選挙で必ず「勝って」いたのである。

6. 弾圧と検閲：1888 年以後のポサーダとマニージャの政治風刺画

最後に、ポサーダの人生と作品についての全体像をより正確に把握する

66 同書、286 頁。

67 同書、323 頁。

68 同書、233 頁。

ために、ラファエル・バラハスとその著書で取り上げている、マニージャ（ポサーダと同様の大衆版画家）のディアス独裁政権に対する態度と、ポサーダのそれとの違いについても触れることにする。

まず、マニージャについて少々説明をする。

マニージャはメキシコ市出身で、一生をそこで暮らした版画職人である。彼に関しては、最近まで詳細はほとんど知られていなかったが、エリア・エンマ・ボニージャ＝レイナ⁶⁹とラファエル・バラハスという傑出した二人の研究によって、徐々に明らかにされている。

バラハスのおこなったマニージャとポサーダの政治風刺画の比較によって、マニージャのいままで考えられていなかった一面が浮き彫りになった。

マニージャは生涯を通じて、ポサーダと比べると作風が稚拙であると見なされてきていた。この作風における技術力の荒さゆえに、今まで洗練された知性や批判精神と結びつけてこられなかったことは反省すべきことである。このような偏見によって、マニージャはポサーダほど関心を持たれてこなかったのだ。しかし、バラハスはこの技術力と作品の内容とは別物であることを明らかにしてくれた。

マニージャは偏見を持たずに見れば、ポサーダより政治批判において妥協がない。彼の風刺画は直截的にディアスの反憲法的で抑圧的な行為を、外形的にも道義的にも醜いものとして描き⁷⁰、チフスより恐ろしいものであるというような描写を行っている⁷¹。それに比すると、ポサーダは、ディアスが花嫁として迎えた憲法に、結婚後に刃物を向けているといった絵ですら、ディアスを偉丈夫として描いている⁷²。しかも、ディアスが他の有力者の野心にブレーキをかけているという点では、社会に貢献している点もあるというような描き方さえしていることがある⁷³。バラハスは、ポサーダが反ディアス系新聞とは微妙に一線を引いていたのに対して、マニージャの方はむしろ彼らを堂々と支持していたことも示している。

バラハスはマニージャがその風刺画のせいで投獄されたことがあったか

69 Helia Bonilla Reyna, *Manuel: protagonista de los cambios en el grabado decimonónico*, México, CONACULTA, 2000 を参照。

70 『Gil Blas Cómico』、1895年6月29日。Barajas、前掲書、143頁を参照。

71 『La Casera』、1893年7月9日。同書、191頁を参照。

72 『La Guacamaya』、1904年2月11日。同書、295頁を参照。

73 『Gil Blas』、1893年5月4日。同書、131頁を参照。

どうかにまでは言及していないが、ここまで直截的にディアスを批判した版画や文章を出したことで、そうあっても何ら不思議はない⁷⁴。

バラハスの研究、とりわけマニージャとポサーダの比較を通じて、ポサーダが「革命的」であったというイメージが必ずしも正確ではないことが判明した。無論、筆者はポサーダを貶め、マニージャを礼賛しているわけではない。しかしながら、この比較によって、政治的な点から見れば、この二人のうち、マニージャの方がより「革命的」であったという事実を私達は突きつけられる。長い間、マニージャの作品の一部がポサーダのものとして誤認されていたことがこの誤解を招いたのであるが、従来のメキシコ美術史家の怠慢は責められよう。

結論

長い間、ポサーダの「革命家」としてのイメージを傷つけないがために、意図的に彼については隠されてきたことがあった。彼については何百もの書籍や記事が書かれてきたが、いずれもステレオタイプの焼き直しであった。ポサーダの作品は、常に文脈から離れて、挿画だけで紹介されてきた。しかしながら、そのような時代は終わったと言えよう。現在、ポサーダの価値は、75年間にわたって作られてきたイメージでは語られなくなり、より広いメキシコ出版史の枠組みの中で正当に評価されている。喜ばしいことに、不合理な賛美の時代は過去のものとなり、死後100年を経て、彼の作品の真価が知られるようになったのである。

74 1893年10月1日発行の『ラ・カセーラ』紙にマニージャによる「ポルフィリオ・ディアス將軍への公開書簡」が載っている。その内容が以下のようなものである。「再選や印紙税や生活必需品に対する税金を廃止すると公約して大統領職になられた將軍殿はお忘れか。それらを守られたか？ 私が思うに、守られていない。あれほどの血の犠牲を出したトゥクステペック法案（再選禁止法）はどうなったか？ 我々は、この法案こそが共和国を再建するものと信じたが、その後、昔の貴殿の公約はどうなったか？ トランプの城のように風が吹いたら崩れ落ちたのか？ 貴殿はこの質問に答えねばならぬ。さもなくば、私が貴殿を公人として厳しく糾弾することになるであろう」。同書、188頁。

参考文献

BARAJAS, Rafael, *La historia de un país en caricatura: la caricatura de combate 1829-1872*, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 2000.

_____, *Posada: Mito y mitote*, México, Fondo de Cultura Económica, 2009.

CARRILLO AZPEITIA, Rafael, *Posada y el grabado mexicano*, México, Panorama, 1991.

GANTÚS, Fausta, *Caricatura y poder político: crítica, censura y represión en la ciudad de México, 1876-1888*, México, El Colegio de México, Instituto Mora, 2009.

GÓMEZ SERRANO, Jesús, *José Guadalupe Posada: testigo y crítico de su tiempo 1866-1876*, México, Universidad Autónoma de Aguascalientes, Secretaría de Educación Pública, 1995.

GONZÁLEZ LEAL, Mariano, *La producción leonesa de José Guadalupe Posada*, México, Lito Offset Lumen, 1971.

TOPETE DEL VALLE, Alejandro, *José Guadalupe Posada: prócer de la gráfica popular mexicana*, México, Edición del Seminario de Cultura Mexicana, 1957.

“*Barrio de San Marcos*”, Gobierno del Estado de Aguascalientes, 日付不明,

< <http://www.aguascalientes.gob.mx/segob/ArchivoHistorico/docs/sanmarcos.pdf> > [最終閲覧日 2013 年 10 月 30 日]

“*Cronología de José Guadalupe Posada*”, Museo Nacional de la Estampa, 日付不明,

<<http://www.museonacionaldelaestampa.bellasartes.gob.mx/pdf/CronologiaPosada.pdf>> [最終閲覧日 2013 年 10 月 30 日]

版画一覧

● GÓMEZ SERRANO 『José Guadalupe Posada: testigo y crítico de su tiempo 1866-1876』より

『El Jicote』 1 号～ 11 号、アグアスカリエンテス市、1871 年。

- GONZÁLEZ LEAL, 『La producción leonesa de José Guadalupe Posada』 より
 - 『Libro de Moral Práctica』、レオン市、1876年。
 - 『Verdadero Retrato de la Milagrosa Imagen de Nuestro Padre Jesús, que se venera en la Iglesia del Tercer Orden de León』、レオン市、日付不明。
 - 『Ilustración caja de cerillos de la cerillera *El vesubio*』、レオン市、日付不明。
 - 『Iglesia matriz y plaza principal de Guanajuato』、レオン市、日付不明。
 - 『Vista de la prisión o Castillo de Granaditas y sus alrededores』、レオン市、日付不明。
- BARAJAS 『Posada: Mito y mitote』 より
 - 『La catástrofe de León. En el terrible momento de la inundación』、『La Patria Ilustrada』、メキシコ市、1880年7月9日。
 - 『Gaceta Callejera』1号、メキシコ市、1892年5月。
 - 『Gaceta Callejera』2号、メキシコ市、1892年5月。
 - 『Gil Blas Cómico』、メキシコ市、1897年4月5日。
 - 『El Fandango』、メキシコ市、1894年5月6日。
 - 『El Periquillo』、メキシコ市、1895年8月8日。
 - 『El Diablito Rojo』、メキシコ市、1909年10月4日。
 - 『La Guacamaya』、メキシコ市、1902年12月5日。
 - 『El Periquillo Sarniento』、メキシコ市、1902年11月30日。
 - 『El Diablo Bromista』、メキシコ市、1901年5月12日。
 - 『El Pinche』、メキシコ市、1904年12月18日。
 - 『La Araña』、メキシコ市、1904年9月1日。
 - 『La Palanca』、メキシコ市、1904年10月20日。
 - 『El Chile Piquín』、メキシコ市、1905年1月19日。
 - 『Tú, gran amigo de los obreros.』、『San Lunes』、メキシコ市、1909年12月20日。
 - 『Como son tratados los obreros en Soria, Guanajuato por un paisanuco, que en su tierra cantó el cuco.』、『La Guacamaya』、メキシコ市、日付不明。

「Situación de la clase obrera.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、日付不明。

「Situación de la clase obrera.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1902年8月11日。

「Caricias de los capataces allá en las vegas, a los enchangados voluntarios...」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1904年8月25日。

「Como se hacen las revoluciones.」、『Gil Blas』、メキシコ市、1911年9月7日。

「Cuando oigas cantar, tiembla tu guitarra.」、『El Diablito Rojo』、メキシコ市、1909年10月。

「El clero y los penitentes.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1904年4月21日。

「De cómo las plazas toma uno muy BRAVO y se queda como el que chifló en la loma...」、『El Diablito Rojo』、メキシコ市、1901年5月20日。

「El feminismo se impone.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1907年7月25日。

「Filosofías populares. ¡¡No raspen que descascaran!!」、『El Diablito Rojo』、メキシコ市、1901年1月21日。

「¡Salve Juárez!」、『El Pinche』、メキシコ市、1904年7月21日。

「Lo del día. Vázquez Gómez.」、『Gil Blas』、メキシコ市、1911年7月16日。

「La paz y los sediciosos.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1911年4月9日。

「Revolucionarios atacando un tren.」、メキシコ市、1910-1912年。

「Un sueño del Diablito」、『El Diablito Bromista』、メキシコ市、1905年10月8日。

「Modernos lynchamientos en los estados.」、『El Diablito Bromista』、メキシコ市、1905年9月24日。

「¡¡Repetición!! La tabla de salvación de los enemigos de la prensa independiente.」、『La Guacamaya』、メキシコ市、1904年2月11日。

「Díaz levantándole a canasta a los ricos y oportunistas」、『Gil Blas』、メキシコ市、1893年5月4日。

「Un matrimonio desafortunado」、『El Diablito Bromista』、メキシコ市、1905年11月26日。

「Libertad de cultos」、『Gil Blas Cómico』、メキシコ市、1895年6月29日。

「Linterna mágica」、『La Casera』、メキシコ市、1893年7月9日。

● GANTÚS 『Caricatura y poder político』 より

「¡Conciudadanos! ¡La República está en completa PAZ!」、『Don Quixote』、メキシコ市、1877年5月18日。

「Se someten a una sola voluntad los partidos de las cámaras」、『El Padre Cobos』、メキシコ市、1880年8月28日。

